

# ロシア俚諺語法の研究 (3)

栗原 成郎

## 第3章 並立複合文による俚諺表現

### 第1節 俚諺表現における複文の種々相

ロシア語の俚諺は、文の構造面から見れば、その半数近くが複文 (сложные предложения) によって表現されている。17世紀のロシア俚諺集《Повести или пословицы всенароднейшие по алфавиту》(П. Симони 校訂本) に収録されている2786個のうち1361個は複文構造をもつ (全体の約49%)。В.П. Жуков《Словарь русских пословиц и поговорок》(Изд. 4-е, исправленное и дополненное. 《Русский язык》, Москва, 1991) に立項されている1385の俚諺のうち632 (約46%) は複文構造をもつ。

俚諺表現において用いられる複文は、多くの場合、二項の節から成り、〈対比〉、〈平行〉、〈対照〉、〈対立〉、〈原因—結果〉、〈条件—帰結〉、〈譲歩—結論〉などの関係を表す。

これらの二項の関係を表す複文構造の諺が、同一の意味を変えることなく、統語的に変異する場合がときおり見られる。

1 (a) “Собака лает, ветер носит.” (С 378/Д 761)

(a) “Собака лает, а ветер носит.” (С. Словарь59)

「犬は吠え、風は運び去る (つまらぬ中傷や誹謗をいちいち気にするな)」

1の(a)は“接続詞欠如複文” (“бессоюзное сложное предложение”)であり、(b)は“並立複合文” (“сложносочиненное предложение”)である。

2 (a) “Поспешись — людей насмешишь.” (Ж 263)

(b) “Поспешит, да людей насмешит.” (Д 613/С 334)

(c) “Кто спешит — людей смешит.” (С. Словарь 34)

「急ぐ者は笑い者になる (：“急がば回れ”)」

2の(a)は接続詞欠如複文、(b)は並立複合文、(c)は“従属複合文” (“сложноподчиненное предложение”)である。

3 (a) “Кошка из дому — мышка на стол.” (Рыбникова 121)

(b) “Кошки — со двора, а мышки — по столам.” (А 142)

「猫が家にいなければ、鼠が食卓にやって来る」

(c) “Когда нет кота в дому, то играют мыши по столу.” (С 172)

「猫が家にいなければ、鼠が食卓にきて遊ぶ」

3の(a)は接続詞欠如複文、(b)は並立複合文、(c)は従属複合文である。

ロシア語の俚諺表現における接続詞欠如複文は、以上の例からも推測がつくように、二項（あるいはそれ以上）の節を接続詞なしに並列接続させること(parataxis)によって並立複合文ないし従属複合文と同一の構文的意味を表現している。接続詞欠如複文は、接続詞や関係詞（関係代名詞、関係副詞）という文法的標識が欠如しているにもかかわらず、それらの文法的機能を文としての勢い（抑揚）や節と節のあいだの緊張関係のうちに内蔵している。

接続詞欠如複文はロシア語俚諺語法の特徴の一つに数えられるものであって特別の考察を要するが、それに先立って俚諺構文としての並立複合文および従属複合文の性格を検討しておきたい。

## 第2節 接続詞 a をもつ並立複合文

一般に、“сочинительные союзы”(等位接続詞、並立接続詞)によって二項(あるいはそれ以上)の節が文法的に連結される文を並立複合文(сложносочиненные предложения)と言う。

接続詞 a は等位接続詞のなかでも諺表現において最も頻繁に用いられ、その機能もきわめて多様である。

### 1) 〈対比〉関係 (сопоставительные отношения)

対象・現象間の相異に基づいて節と節との対比関係を表す。

“Жена приласкает, а мать пожалеет.” (Ж 117)

「妻はやさしくしてくれるが、母はいとおしんでくれる(母は妻より親身)」

“Мужик да собака на дворе, а баба да кошка в избе.” (Ж 178)

「男と犬は家の外にいるもの、女と猫は家の中にいるもの」

“Руки делают, а спинка отвечает.” (Д 248)

「手は仕事をし、背中はそれに応じる」

“Душа душу знает, а сердце сердцу весть подает.” (Д 316)

「魂は魂を知り、心は心に伝える」

“Хвали рожь в стогу, а барина в гробу” (Ж 340)

「ライ麦をほめるならいなむら稲叢に積んでから、旦那をほめるなら棺桶おほに納まってから(：“棺を蓋いて事定まる”)」

### 2) 〈譬喩〉関係 (сравнительные отношения)

〈対比〉の関係が〈比較・譬喩〉の関係によって複合化される場合がある。この場合、譬喩を含む節はつねに前置される。

“Рысь пестра сверху, а человек лукав изнутри.” (Д 317)

「山猫は外側がまだら、人間は内側がしみだらけ」

“Червь дерево тлит, а злая жена дом изводит.” (Д 398)

「虫は樹を<sup>むしば</sup>蝕み、悪妻は家を食いつぶす」

“Моль одежду ест, а печаль — сердце (человек).” (Д 126)

「衣魚は衣服を蝕み、悲しみ<sup>しみ</sup>は人の心を蝕む」

“Ржа железо ест, а печаль — сердце.” (Д 125)

「錆は鉄を腐蝕し、悲しみは心を蝕む」

“Рыба ищет, где глубже, а человек, где лучше.” (С 357)

「魚はより深い所を求め、人はより良い所を求める」

3) <反意的対立>の關係 (сопоставительно-противительные отношения)

単文と単文が二項の節として接続詞аにより<反意的対立>の対比關係に立つ。

“Плуг кормит, а лук портит.” (Д 269)

「犁 [=農耕] は人を養うが、弓 [=戦争] は人を損う」

“Воин воюет, а жена дома горюет.” (Д 263)

「兵士は戦い、その妻は家で悲しむ」

4) <否定的対句> (отрицательный параллелизм)

対比される二項が否定文である場合。

“Мрут люди не по старости, а живут они не по младости.” (С 1494)

「人の死ぬるは老いのゆえならず、人の生くるは若さのゆえならず」

“На ласковое слово не подайся, а на грубое слово не гневайся.” (Симони 1494)

「甘い言葉につられるな、乱暴な言葉に腹を立てるな」

“Доброго не бегай, а худого не делай.” (Д 108)

「善き事は避けるべからず、悪しき事は為すべからず」

1) ~4) の諸関係を通じて全体として、対比される部分をもつ並立複合文は対句という統語的平行関係の原則に基づく明瞭な二項性によって特徴づけられている。対を成す統語的平行部分<sup>つ</sup>は両肢文(不完全両肢文も含む)あるいは単肢文である。後続節の統語構造は先行節の統語構造によってあらかじめ決定される。先行節の述部に動詞述語が省略されていれば、後続節も同様の述部形態をとる。また後続節の述部が先行節の述部と共通項をもつときにはその項は省略される。

“Я про сапоги, а он про пироги.” (Д 439)

「私は長靴の話をし、彼はピロークの話をする(互いに言うことがてんでんばらばら)」

“Бог шепчет с кумою, а убог с сумою.” (С 82)

「神は教母と囁き交わし、貧乏人は合切袋<sup>がっさいぶくろ</sup>と囁き交わす」

“Красна птица перьем, а человек ученьем.” (Д 452)

「鳥は羽根によって美しく、人は学びによって美しい」

#### 5) 〈対照〉 (контраст)

並立複合文の二項が相互にコントラストを示す。

“Стыдливый покраснеет, а бесстыжий побледнеет.” (Д 319)

「恥を知る者は赤くなり、恥知らずは蒼ざめる」

“Руки работают, а голова кормит.” (Д 328)

「手は働き、頭は養う」

並立複合文の二項の節はここにおいても対句になっており、それによって〈対照〉の理念が表現されている。〈対照〉の関係は〈対比〉の関係と

酷似しているが、対照関係を表現するための統語手段が語彙的手段によって補足されることによって両者は区別される。すなわち対になって対照される節に反意語があるか、あるいは節と節が反義的な意味をもつかが弁別的特徴となる。

“Чужая жена — лебедушка, а своя — полынь горькая.” (Д 388)

「他人の妻は白鳥、自分の妻はにがよもぎ」

“Глупый осудит, а умный рассудит.” (Д 464)

「愚者は非難し、賢者は考慮する」

“Умный любит учиться, а дурак учить.” (Д 47)

「賢者は学ぶことを好み、愚者は教えることを好む」

“Богатому — как хочется, а бедному — как можется.” (Д 72)

「金持は好きなだけ、貧乏人はできるだけ」

6) 〈反意的制限〉の関係 (противительно-ограниительные отношения)

並立複合文の第二節が第一節で与えられている情報の内容に制限を加えるかもしくははなにかそれに相反するものを表す。

“Мечом злато добывают, а меч златом покупают.” (С 223)

「<sup>きん</sup>金は剣で手に入れることができるが、剣は金で買うもの」

“Молодец молодой конь, а с ним без хлеба будешь.” (Д 378)

「若者は若駒、だが彼と一緒にだとパンにはありつけない [若い馬は犁をひくには役立たないことから]」

“Кривой не беда, а горе криводушный.” (Д 330)

「片目であることは不幸ではないが、心が曲がっていることは災いだ」

7) 〈補足的情報〉 (дополнительное сообщение)

“Ум хорошо, а два лучше.” (С 418)

「一人の知恵もよいが、二人の知恵はさらによい（：“三人寄れば文殊の知恵”）」

“В гостях хорошо, а дома лучше того.” (Д 877)

「お客に行くのもよいが、我が家にいるのはさらによい」

先行の節が〈制約〉を受けるという点では6) の関係と似ているが、次の点で異なる。〈反意的制限〉の場合は、後続節の意味は先行節の内容から生じるものではなく、その発展でもないが、7) の場合は、第二節の内容が第一節の内容によって喚起されており、あるいはそれを契機とした補足的情報となっている。すなわち、後続節には先行節において述べられていることにたいして対照的であるような新情報が含まれている。

“Жало остро, а язык острей того.” (А 95)

「蜂の針は鋭いが、人の舌はそれより鋭い」

“Невеличка блошка, а спать не дает.” (Д 594)

「蚤は小さいが、人を眠らせない（人を害をなす小悪人）」

“Без детей горе, а с детьми — вдвое.” (А 17)

「子供がいないのは不幸だが、いれば不幸は倍になる」

8) 接続詞 *a* をもつ並立複合文が意味構造のうえで従属複合文に近い場合がある。

(1) 〈帰結〉

“Паны дерутся, а у холопов чубы трещат.” (Ж 245)

「地主たちが殴り合うと農奴たちの前髪がちぎれる（強い者・上の者が争うと弱い者・下の者がその側杖そばつえを食う）」

“Борода выросла, а ума не вынесла.” (Д 329)

「鬚は生えたが、知恵は得られず」

(2) 〈譲歩〉

“Жена мужа бьет, а под свой нрав ведет.” (Д 392)

「妻は夫を殴らないが、自分の気質に引き入れる」

“Новгород, Новгород, *a* постарше старого.” (Д 345)

「ノヴゴロドは新町（ノヴゴロド）と言うけれども、最も古い町」

“Совесть без зубов, *a* загрызет.” (Д 317)

「良心は歯がないにもかかわらず、心を噛む」

〈譲歩〉の接続詞がある場合もある。

“И добрая мачеха, *a* все не мать.”

「継母は良い継母であっても、やはり母ではない」

〈譲歩〉を表す命令形とその否定反復がある場合もある。

“Бойся, не бойся, *a* року не миновать.” (Д 27)

「恐れようと恐れまいと運命を免れることはできない」

(3) 〈条件〉

“Не научил плетью, *a* дубиной не научишь.” (Д 374)

「鞭で教えて効果がなければ、棍棒で教えることはできない」

〈Был бы N<sub>i</sub>〉の条件文が先行する場合、接続詞*a*によって帰結文が結合されることが多い。

“Было бы болото, *a* черти будут.” (Д 306)

「沼あれば悪魔あり。(それなりの条件があればそれを悪用する者が現れる;悪がはびこるにはその温床がある)」

“Было бы корыто, *a* свиньи найдутся.” (А 32)

「餌桶があれば豚がやって来る(なにか利用できるものがあれば、必ず便乗する者が現れる)」

(4) 〈目的〉

“Кошку бьют, *a* невестке неветки дают.” (Д 416)

「猫を打つのは嫁への<sup>つち</sup>面当て」

## 第3節 接続詞 да をもつ並立複合文

接続詞 да は接続詞 а に次いで俚諺の言語における統語関係の表現手段として広く用いられる。

## (1) 〈反意〉

“Корень учения горек, да плод его сладок.” (Д 451)

「学びの根は苦いが、その実は甘い」

“Здоров на еду, да хил на работу.” (Д 422)

「食うことにかけては健康だが、働くことにかけては病弱（：“仕事幽霊飯弁慶”）」

“Рожа крива, да душа пряма.” (Д 323)

「<sup>つら</sup>面は曲がれど心は正し」

“Платье черненько, да совесть беленька.” (Д 771)

「着ている服は薄汚れていても心は潔白」

反意接続の関係は、制約性、譲歩、条件のニュアンスによって複雑化する。

〈制約性〉のニュアンス

“Был конь, да изъездился.” (Д 310)

「馬がいたが、乗りつぶされた（：“麒麟<sup>きりん</sup>も老いては鴛馬<sup>どば</sup>に劣る”）」

“Видит собака молоко, да в кувшине глубоко.” (Д 924)

「犬はミルクを見るが、それは水差しの底」

“Кошка любит молоко, да рыло коротко.” (Д 924)

「猫はミルクが好きだが、鼻面が短い」

“Криво рак выступает, да иначе не знает.” (С 924)

「ざりがには斜めに歩き、ほかの歩き方を知らない」

〈譲歩〉のニュアンス

“Близко локоть, *да* не укусишь.” (Д 921)

“И близок локоть, *да* не укусишь.” (Д 924)

「肘は近くにあるが、噛むことはできぬ」

“Ворона и за море летала, *да* вороной и вернулась.” (Д 472)

「<sup>から</sup>鳥は海の向こうへ飛んで行って見たが、鳥のままで戻ってきた

(：“馬鹿は死ななきゃ治らない”)」

“И молебен петь, *да* пользы нет.” (Д 37)

「祈りを唱えてみてもご利益なし」

〈条件〉のニュアンス

“Не было бы счастья, *да* несчастье помогло.” (Ж 201)

「不幸の助けがなかったならば、幸せはなかったであろう (：“禍いを転じて福となす”)」

## (2) 〈付加〉

接続詞 *да* とその変種 *да и* は複文の節と節との併合関係を表すことがある。

(a) 付加される節は先行節の内容を一層詳しく説明し、正確化する。

“Сдружилась старость с убожеством, *да и* сам не рада.” (Д 375)

「老いは貧困と仲良しになったが、自分はいっこうに嬉しくない」

先行節の内容によって喚起される新しい情報が付加される。

“От волка бежал, *да* на медведя попал.” (Д 37)

「狼から逃げて熊に出くわす (：“一難去ってまた一難”)」

“Чужой обед похваляй, *да и* сам ворота отворяй.” (Д 119)

「よその家の食事を讚めたなら、自分の家の門を開けておけ」

(b) 先行節の意味から生じる帰結が後続節として付加される。

“Высидела курица утят, *да и* плачется с ними.” (Д 409)

「めん鶏があひるの雛を孵して、一緒になってがあがあ鳴く始末」

“Варила баба брагу, *да и* упала к оврагу.” (Д 36)

「女だてらにビールを造り、谷間に落ちこむ」

第一節で述べられた内容に対して第二節の内容が反意的に対立する場合がある。

“Жить тяжело, *да и* умирать нелегко.” (Д 287)

「生きるのは辛い、死ぬのも楽ではない」

この反意的対立の関係は接続詞 *a* で置き換えられることがある。

“Жить горько, *да и* умереть не сладко.” (Д 287)

「生きるのは辛い、死ぬのも楽ではない」

“Жить грусно, *a* умирать тошно.” (Д 287)

「生きるのは切ないが、死ぬのも苦しい」

“Не велика блоха, *да* спать не дает.” (С 261)

“Невеличка блошка, *a* спать не дает.” (Д 594)

「蚤は小さいが、人を眠らせない」

〈付加〉の関係を表す並立複合文において実際に意味をもつ部分は付加される文(節)であり、そこにおいて諺の基本的内容である倫理性・教訓が集約されている。

#### 第4節 接続詞 *и* をもつ並立複合文

##### (1) 〈並立〉

“Жить вместе *и* умереть вместе.” (С 127)

「生きるのも一緒なら死ぬのも一緒 (：“一蓮託生”)」

“Богатство живет, *и* нищета живет.” (Д 74)

「富があるところには貧もある」

## (2) 〈条件—帰結〉

接続詞 *и* によって結ばれる二項構造の並立複合文は俚諺表現においては実際には〈並立〉の関係よりも〈条件—帰結〉の関係を表していることが多い。

“Богатство полюбится, *и* ум расступится.” (Д 60)

「富が愛されれば理性は脇に寄る」

“Бедному жениться — *и* ночь коротка.” (Д 74)

「貧乏人が嫁を取れば夜は短くなる」

“Лиса придет — *и* курица раскудахчится.” (Д 129)

「狐がやって来れば、めん鶏がクックッと鳴きだす」

“За двумя зайцами погонишься, *и* одного не поймаешь.” (Д 745)

「二兎を追う者は一兎をも得ず」

“Хозяин весел — *и* гость радостны.” (Д 646)

「主人が楽しければ客も嬉しい」

“Нужды не увидишь, *и* в добре не походишь.” (Д 81)

「貧窮を知らなければ幸福に暮らすことはできない」

“Сердце веселится, *и* лице цветет.” (Д 967)

「心楽しければ顔かがやく」

“Гром не грянет, *и* мужик не дронет.” (Симони 645)

「雷が鳴らなければ、百姓は身震いしない」

条件節が命令形（単数2人称）によって形成される場合もある。

“Не замахивайся, *и* собака не залает.” (Д 183)

「杖を振り上げなければ犬も吠えかからない」

“Делай добро, *и* тебе будет добро.” (Д 108)

「善をなせば汝にも善が来る（：“情けは人の為ならず”）」

条件節が副動詞によって形成される場合もある。

“Не видав нужды, *и* добра не увидишь.” (Д 81)

「貧窮を知らずして幸福を知ることなし」

接続詞 *и* が〈結果〉を意味する場合もある。

“Рука руку моет, *и* обе белы бывает.” (Д 119)

「手が手を洗い、両手とも白くなる (悪者どうしはかばい合う)」

この諺には接続詞 *а* による同意の表現がある。

“Рука моет, *а* обе хотят белы быть.” (С 356)

(3) 〈時間的継起性〉

〈条件〉—〈帰結〉の関係は時間の流れに沿うならば継起性の表現になる。

“Время придет, *и* час пробьет.” (Д 97)

「時到来れば時が時を告げ知らせる」

“Пора придет, *и* вода пойдет.” (Д 97)

「時が来れば水が流れ出る」

“Судьба придет — *и* руки свяжет.” (Д 380)

「運命がやって来て両手を縛り上げる (男が妻帯させられる)」

(4) 〈反意〉〈制約〉

接続詞 *и* はふつう順接的であるが、反意的・制約的關係にある二項を逆接的に結ぶことがある。

“Гневайтесь, *и* не согрешайте.” (Симони 557)

「腹を立てても罪は犯すな」

“Конь о четырех ногах, *и* тот спотыкается.” (Симони 1356)

「馬は四つ足でもつまずく」

この諺には接続詞 *да/да и* によるヴァリエントがある。

“Конь о четырех ногах, *да и* тот спотыкается.” (С 179)

“Конь о четырех ногах, *да* спотыкается.” (Д 30)

## (5) 〈付加〉

“Счастлив медведь, что не попался стрелку, и стрелок счастлив, что не попался медведю.” (Д 51)

「鉄砲打ちに出くわさなかった熊は幸い、熊に出くわさなかった鉄砲打ちは幸い」

並立複合文による俚諺表現において接続詞 *и* が用いられる例は以外に少ない。З.К.Тарланов の概算によれば、接続詞 *и* をもつ並立複合文は並立複合文全体の1%にすぎない。並立複合文を構成する接続詞のうち最も使用頻度が高いのは *а* であって90%、それに次ぐ *да* は10%を超えない [Тарланов 1982, 16]。

接続詞 *но* は俚諺表現の並立複合文ではほとんど用いられない。

“Не всегда вор приходит, *но* всегда его ждут.” (С 263)

「泥棒はいつも来るとはかぎらないが、いつも来ると用心せよ」

〈反意〉の接続詞 *ино* が用いられる例も若干ある。

“Не все таской, *ино* и лаской.” (Д 111)

「髪を引っ張るばかりでなく撫でることによって(：“柔よく剛を制す”)」

“Не все хлыстом, *ино* и свистом.” (Д 111)

「鞭によるばかりでなく口笛によって」

“Не все горлом, *ино* и руками.” (Д 265)

「罵り合いばかりやっていないで、殴り合え」

## 第5節 接続詞 *либо* – *либо/или* – *или* をもつ並立複合文

### 〈離接〉

離接的關係 (論理学で言う “選言原理”) は諺表現にとっては特徴的な

ものではなく、例も少なく、その関係を表す述部の主成分は多くは名詞句であり、形態的に単純である。

“*Либо в стремя ногой, либо в пень головой.*” (Д 51)

「<sup>あぶみ</sup>鐙に足をかけるか、切株に頭をぶつけるか (一か八か、当って砕ける)」

“*Либо сена клок, или вилы в бок.*” (Д 51)

“*Или сена клок, или вилы в бок.*” (С 155)

「(牛が) 干し草の一束を取るか、それとも熊手が脇腹に刺さるか (一切か然らずんば無か)」

“*Либо рыбку съесть, либо на мель сесть.*” (Ж 161)

「魚にありつくか座礁するか (一か八か)」

“*Или пан, или пропал.*” (С 154)

「領主様になるかのたれ死か (のるかそるか)」

“*Либо грудь в крестах, либо голова в кустах.*” (Ж 161)

「十字勲章に埋まった胸か、それとも藪の中に転がった首か」

“*Или в сук, или в тетерю.*” (С 154)

「枝に当たるか雷鳥に当たるか」

## 第6節 接続詞 ни – ни もつ並立複合文

〈否定的列挙〉

“*Ни Богу свеча, ни чорту ожиг (кочерга).*” (Д 262)

「神に灯明を供えるでもなく、悪魔に火掻き棒を渡すでもない (何の役にも立たない人)」

“*Ни моря без воды, ни войны без крови.*” (Д 263)

「水のない海はなく、流血のない戦争はない」

“*Ни коня удержат без узды, ни богатства без ума.*” (С 298)

「<sup>くつわ</sup>轡なくして馬を御することはできず、理性なくして富を管理することはできない」

“*Ни* радость вечна, *ни* печаль бесконечна.” (Симони 1656)

“*Ни* радости вечной, *ни* печали бесконечной.” (Д 136)

「無限に続く喜びはなく、終りのない悲しみはない」

## 第4章 従属複合文による俚諺表現

### 第1節 接続詞 что をもつ従属複合文

俚諺表現においては“接続的従属”(союзное подчинение)は微弱な統語現象である。従属複合文(сложноподчиненное предложение)を構成する“従位接属詞”(подчинительный союз)のうち最も広く用いられるのは что であるが、俚諺表現においては民衆語に特有の用法が見られる。

接続詞 что をもつ従属節は主節に対してさまざまな関係に立つ。主節と従属節の位置は固定的であり、実際に従属節はつねに後置される。

#### (1) 〈理由〉〈原因〉

接続詞 что が“ибо, потому что, оттого что”意味で用いられ、従属節が主節の述部の理由・原因を表す。

“И пастух овцу бьет, что не туда идет.” (Д 209)

「羊が間違った方角に行けば、羊飼でも羊を打つ」

“Запеклися уста, что мошна пуста.” (Д 64)

「財布がからっぽで唇が荒れる」

“Аль я хуже людей, что везде стоя пью.” (Д 34)

「私が人並以下なのは、所かまわず立ち飲みするからか」

#### (2) 〈帰結〉

接続詞 что が“так что”の意味で用いられる。

“Пришло в тупик, что некуда ступить.” (Д 130)

「袋小路に迷いこみ、にっちもさっちも行かない」

“Починил дед клетку, что и собаки лезят.” (Д 701)

「じいさんが修理した鳥籠なので、今では犬どもが忍びこむ」

## (3) 〈説明〉

従属節が主節の代名詞の形態に相関し、主節の代名詞 *то* の内容を説明する。

“И *то* бывает, что овца волка съедает.” (Д 186)

「羊が狼を食うことだってある（：“窮鼠猫を噛む”）」

“И *то* бывает, что и деньгам не рад.” (Д 59)

「金があつて嬉しくないことだってある」

“Не за *то* волка бьют, что сер, а за *то*, что овцу съел.” (Д 178)

「狼が打たれるのは灰色だからではなく、羊を食べたからだ（罰せられるには正当な理由がある）」

“Нет *того* спорее, что кулаком по шее.” (Д 211)

「鉄拳制裁ほど効きめのあるものはない」

## (4) 〈条件〉

接続詞 *что* で導かれる従属節が条件の意味を表すことがある。

“Видима беда, что у старого жена молода.” (Д 382)

「夫が年寄りで妻が若ければ、不幸は目に見えている」

“Видимая беда, что во ржи родилась лебеда.” (С 32)

「ライ麦畑にアカザが生えたら不幸は明らか」

概してロシア語においては条件を示す従属節は自由にその統語的位置を変えることができるが、この場合は従属節は後置され、条件具有という閉鎖的な意味と固定的構造をもつ。

## (5) 条件構文としての 〈что..., то〉

構文 〈что..., то〉 が一種の条件構文として 〈как скоро..., так〉 (もし…でさえあれば)、〈как..., так〉 (…であれば…)、〈всякий раз как〉 (…するたびに)、〈сколько..., столько〉 (…ならば…それだけ) の意味で用いられる場合がある。

“Что слово молвит, *то* рублем подарит.” (Д 445)

「ひと<sup>こと</sup>言言えば1ルーブル」

“*Что ударишь, то и уедешь.*” (Д 252)

「殴ったら、それでおさらばだ」

“*Что потешит (счастье), то и проживем.*” (Д 137)

「慰められさえすれば生きて行かれる」

“*У кузнеца что стукнул, то гривна.*” (Д 568)

「鍛冶屋ではひと打ちすれば1グリーヴナ」

“*Доброму человеку что день, то и праздник.*” (Д 109)

「善人にとっては1日あればその日は祝日」

“*Что город, то норы, что деревни, то обычай.*” (Д 689)

「町ごとに習慣あり、村ごとに風習あり」

(6) 比較構文としての〈что..., то〉

俚諺表現においては〈что..., то〉が〈чем..., тем〉の代り用いられることがある。

“*Его что больше слушаешь, то пуше врет.*” (Д 201)

「彼の話をとくさん聞いてやればやるほど、とくさん嘘をつく」

“*Что беднее, то щедрее.*” (Д 87)

「貧しければ貧しほど、それだけ気前がよいものだ」

“*Кошку что больше гладишь, то больше хвост дерет.*” (Д 808)

「猫は可愛がれば可愛がるほど尻尾を高く上げる（優しくすればつけ上がる人）」

“*Что старее, то правее, а что моложе, то дороже.*” (С 459)

「老いるほど正しく、若いほどに貴い」

(7) 択一的譲歩としての〈что..., что〉

接続詞 что の反復は標準文語の〈ли..., ли〉、〈ли..., или〉の代りに用いられる。

“*Что выпито, что вылило — все равно.*” (Д 889)

「飲み干そうが、注ぎ尽くそうが、どっちみち同じこと」

“*Что совой о пень, что пнем о сову, а все сове больно (а все одно).*”

(Д 949)

「<sup>ぶくろ</sup>梟を切株にぶつけようが、切株を梟にぶつけようが、梟にとって痛さは同じ」

“*Что черно, что бело, вызолотить — все одно.*” (Д 164)

「黒だろうが白だろうが、金メッキをすれば同じこと」

“*Все один Бог, что у нас, что у них.*” (Д 19)

「我々の所だろうが、彼らの所だろうが、神様はつねに同じ」

“*Что осьмнадцать, что без двух двадцать.*” (Д 950)

「18だろうと、20引く2であらうと (同じこと)」

(8) 〈限定〉

イディオムの構文〈Только и N<sub>2</sub>..., что〉および〈Не только N<sub>2</sub>..., что〉において接続詞 что は〈限定〉〈排他性〉を表す。

“*Только и ходу, что из огня да в воду.*” (С 339)

「火の中を出たら水の中に入る以外に道はない (御難続き)」

“*Только и ходу, что из ворот в воду.*” (Д 65)

「門を出たら水の中に入る以外に道はない (人生は苦難の道)」

“*Только у молодца и золотца, что пуговка оловца.*” (Д 64)

「若者の身につけているもので光っているのは<sup>は</sup>錫のボタンだけ」

“*Не только свету, что в окне.*” (Д 54)

“*Не только света, что в окне.*” (С. Словарь 45)

「窓に射している光だけが光なのではない (窓から見えるものだけが世界ではない。世界にはもっと見るべきものがある)」

“*Не только добра, что много серебра.*” (Д 62)

「銀がたくさんあるだけで財を成すとは言えない(：“西施にも醜なる所有り”)」

## 第2節 接続詞 *коли* をもつ従属複合文

接続詞 *коли* (*коль*) に導かれる従属節は前置される場合 (*препозиция*) と後置される場合 (*постопозиция*) とがあるが、後置の場合のほうがはるかに多い。

### 1) 前置の場合

主節はその頭に従属節を受ける形式的な接続詞 *так, то, ин* をもつことが多い。従属節は主として条件を表す。

“*Коли стыдно, так закройся (так зажмурься)!*” (Д 319)

「恥ずかしければ身を隠せ (まぶたを閉じろ)」

“*Коли богатый заговорит, так есть кому послушать.*” (Д 56)

「金持が話をはじめると、耳を傾ける者が現れる」

“*Коли нет у попа сапогов, так и в лаптях обедню поет.*” (С 176)

「司祭は長靴を持っていない場合には、草鞋わらじを履いてミサをあげる (最善のものがない場合には次善のものをとる)」

“*Коли у мужа с женой лад, так ненадобен клад.*” (С 176)

「夫婦仲睦まじければ宝はいらぬ」

この諺には条件を表す従属節が後置される次のヴァリエントがある。

“*Не надобед и клад, коли у мужа с женой лад.*” (Д 393)

「(同意)」

“*Коли у мужа с женой совет, так в пост мясоед.*” (С 176)

「夫婦の相談がまとまれば大齋期にも肉食」

“*Коли быть беде, то ее не минуешь.*” (Д 27)

「起こるべき不幸が起これば、それを免れることはできない」

## 2) 後置の場合

### (1) 〈条件〉

“*И комар лошадь свалит, коли волк пособит.*” (Д 693)

「狼の手助けがあれば蚊でも馬を倒す(：“<sup>たこ</sup>蛸の<sup>くそ</sup>糞で頭へ上がる”)」

“*Не дорога и честь, коли нечего есть.*” (Д 412)

「なにも食べる物がなければ名誉も価値なし(：“衣食足れば即ち榮辱を知る”)」

“*Хорошо вору красть, коли ночь темна*” (С 434)

「夜が暗ければ泥棒稼業にとって好都合」

“*Всякая рыба хороша, коли на удочку пошла*” (Рыбникова 122)

「釣針にかかれば、どんな魚も良い魚」

### (2) 〈時〉 〈場合〉

“*И кафган греет, коли шубы нет.*” (С 434)

“*И кафган греет, когда шубы нет.*” (А 112)

「毛皮外套(シューバ)がないときには、農民服(カフタン)でも身を暖める(：“<sup>たい</sup>鯛無<sup>え</sup>く<sup>そ</sup>ば<sup>え</sup>狗母魚”)」

“*Хороша дочка Аннушка, коли хватит мать да бабушка.*” (Д 408)

“*Хороша дочка Аннушка, когда хватит мать да бабушка.*” (С 432)

「お母さんとおばあさんが褒めれば、うちのアンナちゃんは良い娘(身最<sup>み</sup>良<sup>び</sup>い<sup>き</sup>の褒め言葉は額面どおりには受け取れない)」

### (3) 〈説明〉

主節の内容を説明するか、あるいはその理由を解釈する。

“*Зеркало не виновато, коли рожа крива.*” (С 141)

「顔がゆがんでいるのは鏡のせいではない」

“Нечего пенять на зеркало, *коли* рожа крива.” (С 296)

「顔がゆがんでいるからといって、鏡に当たっても仕方がない」

“Трудно тому, *коли* беда придет к кому.” (Д 129)

「辛いのは災いに見舞われた人」

“Живет медведь в лесу, *коли* его не зовут в поле.” (С 122)

「熊が森に住んでいるのは、野にはお呼びでないからだ」

### 第3節 接続詞 *кабы* (как бы) / *если бы* をもつ従属複合文

この文は仮定法の表現として意味的・統語的まとまりをもつ。すなわち従属節によって表されているのは非現実の仮定であり、その非現実の条件が同じように非現実的に思考されている主節の動詞述語の動作を条件づけている。

#### 1) 接続詞 *кабы* による従属節

接続詞 *кабы* をもつ仮定法(条件法)の構文は現代ロシア標準文語においては広い普及は見られないが、ロシアの方言やフォークロアの言語にはしばしばあらわれ、特に17世紀には生きた口語の要素として俚諺集や長司祭アヴァクームの書簡などにおいて多用されている。

接続詞 *кабы* は *как бы* を起源とするが、時間的意味を失って“願望”の意味をもつようになった。

接続詞 *кабы* による従属節はふつう主節の前に置かれ、*коли* の場合と同様に、主節は形式的な語 *так* をもって従属節を受けることが多い。

“*Кабы* бабушка не бабушка, *так* была бы она дедушкой.” (Д 946)

「お婆さんがお婆さんでなかったならば、お婆さんはお爺さんになって

しまうだろう」

“*Кабы* свиные рога — всех бы со свету сжила.” (Д 113)

「もしも豚に角があったならば、みんなを迫害していたであろう(成り上がり者・卑しい者が権力を握ったら悲劇が起こる)」

“*Кабы* снова на свет народиться, знал бы как состареться.” (Д 376)

「もしもう一度この世に生まれることができたなら、いかに老いるかを知るであろう」

“*Как бы* на дятла не свой нос, кто бы его в дереве нашел.” (Симони 1367)

「もしも啄木鳥きつつき くちばしに嘴がなかったならば、樹の中にいるのを見つける者はいなかったであろう(：“雉きじも鳴かすは打たれまい”)」

“*Кабы* на дятла да не свой носок, никто бы его не нашел.” (Д 947)

「もしも啄木鳥に嘴がなかったならば、誰にも見つからなかったであろう」

接続詞 *кабы* と *если бы* が交替する場合がある。

“*Кабы* знал, где упасть, так бы соломки подостлал.” (Д 947)

“*Если бы* знал, где упадешь, подостлал бы соломки.” (С 113)

「どこに落ちるかが分かっていたら、藁わらを敷いていたのに(：“転ばぬ先の杖”)」

*Кабы* ~ *когда бы* が交替する場合。

“*Кабы* на коня не лысинка, цены бы ему не было.” (Симони 1370)

「馬に星(白斑)がなかったならば、馬の価値はないであろう」

“*Когда бы* на добра коня да не лысинка, и цены бы ему не было.” (С 171)

「良馬に星(白斑)がなかったならば、良馬の価値はないであろう」

“*Кабы* на добра коня не спотычка, и цены б ему не было.” (Д 947)

「良馬がつかずくことがないならば、良馬の価値はないであろう」

*Коли бы* が *кабы* の代りに用いられる例もある。

“*Коли б жил покойничек, так бы и не помер.*” (Д 946)

「死者が活着ているのなら、その人は死ななかつたであろう」

Кабы ~ коли бы ~ если бы の交替も起こる。

“*Кабы на хмель не мороз, так бы тын перерос.*” (Д 947)

“*Колиб на хмель не мороз, так он бы через тын перерос.*” (Д 113)

「ホップが寒波にやられなかつたら、柵を越えて伸びていただろう」

“*Кабы на горох не мороз, так бы тын перерос.*” (Д 947)

“*Еслиб на горох не мороз, давно бы через тын перерос.*” (Д 113)

「えんどう豆が寒波にやられなかつたら、柵を越えて伸びていただろう

(: “思ふ事叶わねばこそ憂き世なれ”)」

Кабы による従属節が後置されることは俚諺表現においてはきわめて稀である。

“*Ел бы богач деньги, кабы убогий его хлебом не кормил.*” (Д 77)

「金持は、もし貧乏人が彼をパンで養わないならば、金を食うだろう」

接続詞 кабы を用いた仮定法の構文はロシアの口承文芸の言語、特に俚諺の言語に特徴的に見られる表現である。

В. Даль. *Пословицы русского народа* (Москва, 1862, с. 944-947) には <кабы – еслиб> の見出し項目のもとに 104 例の俚諺が分類・収録されている。しかしこの項目は “状況”、“条件”、“仮定” の意味的特徴に基づいた分類であり、104 例の俚諺のうち助詞 бы/б をともなった形式的に仮定法の構文をもつものは 52 例である。この 52 例のうち圧倒的に多いのは接続詞 кабы をもつ文であつて 35 例、残りは если бы が 2 例、коли б が 1 例である。

Кабы は仮定法の構文をつくる接続詞としては俗語的・方言的と見られているが、助詞としては 19 世紀の標準文語のなかに生き残り、感嘆文の文頭に置かれて強い願望を表す語として用いられるようになった(例: *Кабы*

весна скорее! 「早く春が来ればいいのになあ」。

## 2) 接続詞 если による従属節

接続詞 если を用いた仮定法の構文が俚諺表現にあらわれる例は少ない、と言ってよい。

15～17世紀のモスクワの文献には“時”の副詞に起源をもつ“条件”を表す接続詞 коли, как, кабы, когда が広く用いられるようになっていたが、если は文献上初期には主としてポーランド語からの翻訳に用いられていた。ポーランド語の jeśli に対応する если は естли を起源とする。“条件”を表す接続詞 если は17世紀の末にいたって官庁の実務的な言語(いわゆる“деловой язык”)において用いられるようになったが、その浸透はきわめてゆっくりした速度であった [Булаховский 380-381]。

接続詞 если は17世紀の俚諺集においては使用例がないが、18世紀のピョートル時代の俚諺集では ест либ の形で現れている。

“*Естлиб* на горох не мороз, он бы через тын переросл.” (Симони II 263)  
「もしもえんどう豆が寒波にやられなかったら、柵を越えて伸びていただろう」

“*Естли бы* не закон, не был бы преступник.” (Татищев 1736 г.)

“*Естли бы* не закон, не был бы преступник.” (Богданов 1741 г.)

“*Если бы* не закон, не было бы и преступник.” (Снегирев 1848 г.)

「もし掟がないならば掟破りもないだろう」

## 第4節 接続詞 когда をもつ従属複合文

俚諺表現においては接続詞 когда をもつ従属複合文の数は多くない。現代ロシア標準文語の統語法において接続詞 когда をもつ従属節は“時”“条

件” “説明” などさまざまな意味関係を表すことができるが、俚諺表現においてもその統語原則は同じである。

(1) < 仮定 >

接続詞 *коли* による従属節の場合と同様に、事実と反する仮定を表現する。主節と従属節の両方に述語は条件法の形態をとる。従属節は前置され、たいてい主節の初頭に形式語の *так, то* が置かれる。

“*Когда б вещь был человек, так бы и не погибал вовек.*” (С 171)

“*Когда бы человек вещь был, то б не погибал.*” (Д 36)

「もし人間が神通力をそなえていたなら、永久に死なないだろう」

“*Когда бы все знал, так бы не погибал.*” (Д 36)

「人がすべてのことを知っていたなら、死なずにすむだろう」

“*Когда б не зубы, так бы и душа вон.*” (Д 326)

「もし歯がなければ、魂も口から出て行ってしまおうだろう」

この俚諺には次のヴァリエントがある。

“*Кабы не зубы да губы, так бы и душа вон.*” (Д 947)

「もし歯と唇がなければ、魂は口から出て行ってしまおうだろう」

“*Когда бы на дятла не свой носок, никто бы его в дупле не нашел.*” (Д 440)

「啄木鳥に嘴がなかったならば、空洞<sup>うろ</sup>の中で誰にも見つからなかっただろう」

(2) < 時 > < 条件 >

“*Когда железо кипит, тогда его и ковать.*” (Симони 1243)

“*Когда железо кипит, тогда и надо варить.*” (Д 708)

「鉄は熱いうちに打たねばならぬ」

“*Когда дрова горят, тогда и кашу варят.*” (Д 708)

「薪が燃えれば粥は炊ける」

“Когда пирог с грибами, так все с руками.” (C 173)

「きのこ入りのピロークがあれば、みんなが手を伸ばしてやって来る(お奢ってやればついて来る者は多い)」

“Когда судью подаришь, то всех победишь.” (C 173)

「裁判官を買収すれば誰にでも勝てる」

〈時〉を表す場合は〈когда — тогда〉が相関するのが普通。

“Когда деньги говорят, тогда правда молчит.” (Д 58)

「金が物を言う時は真実は沈黙する」

“Когда будет пир, тогда будет и песни.” (C 171)

「宴席に歌はつきもの」

“Когда кошки грызутся, тогда мышам приволье; а когда пастухи дерутся, тогда и волки обдирают овец.” (C 172)

「猫たちが噛み合っているとき、鼠たちは自由気儘、羊飼たちが殴り合っているとき、狼たちは羊たちを食い荒らす(：“漁夫の利”)」

“Тогда сироте и праздник, когда белую рубаху дадут.” (Д 411)

「きれいなシャツを着せてもらうとき、みなし児にもお祭り」

上の例のように従属節が後置される場合は、従属節が主節の内容の説明になっていることが多い。

“Торькие похороны, когда жена мужа хоронит.” (C 76)

「妻が夫を埋葬する時の葬儀はつらい」

“Не тогда плясать (некогда плясать), когда гроб станут тесать.” (Д 705)

「棺桶を作りはじめてから踊ってみても始まらない」

“Хвалят на девке шелк, когда в самой девке есть толк.” (А 316)

「娘さんのシルクのドレスを讚めるなら、その娘に分別がある場合」

## 第5節 接続詞 как をもつ従属複合文

接続詞 *как* は、*что* と同様に、現代ロシア標準文語においても口承文芸の言語においても多様な機能をもつ。接続詞 *как* によって従属節は主節と連関し、さまざまな意味をもつ。

### (1) < 仮定 >

叙想の助詞 *бы* を述部にもち、仮定法(条件法)の文を構成する。

“*Как бы на дятла не свой нос, кто б его в дереве (дупле) нашел.*” (С 164)

「もしも啄木鳥に嘴がなかったならば、樹(空洞)の中にいるのを見つける者はいなかったであろう」

“*Как бы не было снегу, не было бы и следу.*” (С 164)

「雪がなかったならば足跡もつかなかっただろう」

### (2) < 条件 >

< *как... , так (и)* > の構文で < 条件 - 様態(結果) > 「…すれば(であれば)、そのように(それなりに)」の意味を表す。

“*Как старому жениться, так и ночь коротка.*” (Д 382)

「年寄が妻帯すれば、それだけ夜は短い」

“*Как деньги при бедре, так помогут при беде.*” (Д 52)

「腰に金をつけておけば、苦境の際に役に立つ」

“*Как деньги есть, так и все есть.*” (Богданов)

「金があれば、何でもある」

“*Как нажито, так и прожито.*” (Д 230)

「儲けたように消えて行く(：“悪銭身につかず”)」

“*Как пришло, так и прошло.*” (Татищев)

「入って来たように出て行く(：“悪銭身につかず”)」

“Как хлеба край, так под елью рай ; а как хлеба ни куска, так и везде тоска.” (С 167)

「パンの切れ端があれば、<sup>もみ</sup>樅の樹の下も天国、パンのかけらもなければ、どこにいても憂鬱」

“Как кому верят, так тому и мерят.” (Д 232)

“Как тебе верят, так и мерят.” (С 167)

「人は信用の度合で測られる」

接続詞 как による“条件”の従属節は後置されることもある。

“Станешь на людей лапти плести, как нечего есть.” (С 382)

「なにも食べる物がなければ、人のために草鞋を編むことになる」

“Не замесишь густо, как в амбаре пусто.” (Д 77)

「穀物小屋がからっぽなら、練り粉を固くこねることはできない」

接続詞 как による従属節が後置されて“時”を表すこともある。

“Веселье волку — как не слышит за собою гонку.” (Д 135)

「背後に狩り声が聞こえない時は、狼は楽しい気分」

“Тогда сон хвали, как сбудется !” (Д 77)

「夢を讚めるなら夢が叶った時」

この最後の諺には接続詞 коли を用いたヴァリエントがある。

“Хвали сон, коли сбудется.” (С 427)

「(同意)」

## 第6節 接続詞 чтобы/чтоб をもつ従属複合文

### (1) <目的>

主節の動作が行われるための目的を表す。

“Кормят быка, чтоб кожа была гладка.” (Д 121)

「雄牛が肥育されるのは草をなめらかにするため」

“*Чтобы* узнать человека, надо с ним пуд соли съесть.” (Д 317)

「一人の人間を理解するためには彼と共に1ブードの塩を食べなければならぬ」

“Надо поклониться, *чтобы* из ручья напиться.” (Рыбникова 37)

「小川から水を飲むためには身を屈めなければならない」

“Не хвались силою, *чтоб* не заплатить спиною.” (С 295)

「背中で支払う〔鞭打ち刑になる〕ことにならないように力自慢はするな」

“Не тропись жениться, *чтобы* потом на себя не сердиться.” (Рыбникова 90)

「後で自分に腹を立てることにならないように妻帯は急ぐな」

(2) <説明> (定語的従属節として)

従属節は主節にある代名詞ないし副詞と連係して、その内容を具体的に展開する。

“Не для того голова, *чтоб* только шапку носить.” (Рыбникова 72)

「頭は帽子をかぶるためにだけあるのではない」

“Нет такого дерева, *чтоб* на него птица не садилась.” (Д 50)

「鳥がとまらないような樹はない」

“Для того кузнец клещи кует, *чтоб* рук не обжечь.” (Д 51)

「鍛冶屋が火ばさみを造るのは手にやけどをしないため」

“Для того и сотворена щука, *чтобы* караси не дремали.” (С 92)

「シチュウカがいるのは<sup>ふな</sup>鮒が居眠りをしないため」

“На то и щука в море, *чтобы* карась не дремал.” (Рыбникова 151)

「シチュウカが水の中にいるのは鮒が居眠りをしないため(：“油断大敵”)」

“*На то* и орел в небе, *чтобы* воробей не дремал.” (Рыбникова 151)

「空に鷲がいるのは雀が居眠りをしないため」

(3) <要求> (補語的従属節として)

“Жениху надобно искать, *чтоб* хорошую невесту взять.” (С 119)

「花婿は良い花嫁をもらうことを求めねばならぬ」

“Проси Творца, *чтоб* не лешил доброго конца.” (Д 298)

「良い死に方ができるように神に願え」

## 第7節 接続詞のない従属節を受ける主節初頭の 接続詞 так(и)

(1) <条件-帰結>関係

接続詞を用いずに“条件”を表す従属節を受けて文全体の述部に当たる主節の継ぎ目に立ち“帰結”の関係を表す。

“В рубле копейки нет, *так* и не полон рубль.” (Д 95)

「1ルーブリの中に1コペイカが欠ければ1ルーブルに満たない」

“Не стать говорить, *так* и Бог не услышит.” (Д 445)

「声を出して言わなければ神様も聞いてはくださらない」

“Сыпь коню мешком, *так* не будешь ходить пешком.” (С 393)

「馬に十分な餌を与えれば、徒歩で行かずにすむ」

“Не потрудиться, *так* и хлеба не добиться.” (Д 548)

「労せずしてパンを得ることはできない」

“Руки не протянешь, *так* и с полки не достанешь.” (Д 552)

「手を伸ばさなければ棚から物を取ることはできない」

“В поле серпом да вилой, *так* дома ножом да вилой.” (С 56)

「畑で鎌と熊手を振れば、家でナイフとフォークを持つことができる(:

“稼ぐに追い付く貧乏無し”」

“Сена нет, так и солома съедова.” (Д 83)

「干草がなければ藁<sup>わら</sup>でも食える」

“Слово выпустишь, так и вилом не втащишь.” (С 373)

「いったん口に出した言葉は熊手で引き寄せることはできない(“馴<sup>し</sup>も舌に及ばず”)」

“Не разгрызешь ореха, так и ядра не съешь.” (Д 550)

「胡桃<sup>くるみ</sup>を割らなければ仁<sup>にん</sup>を食べることはできない(：“棚<sup>ぼたもち</sup>から牡丹餅は落ちて来ない”)」

(2) <原因-結果> 関係

“Вырос лес, так выросло и топориче.” (Д 227)

「森の木が大きくなれば大斧も現れる(：“恩を仇で返す”)」

“Овец не стало, так и на коз честь пала.” (Д 69)

「羊がいなくて山羊に名誉が廻ってきた(：“次善を選ぶ”)」

“Прозеваешь бражку, так и водицу хлебвай !” (С 344)

「ビールにありつけず水を飲む羽目になる(：“早い者勝ち”)」

“Посулил пан шубу, так и слово его греет.” (С 334)

「旦那様が毛皮外套を下さると約束し、その言葉だけで暖くなる(口車に乗るな)」

(3) <目的>

“Не дразни собаку, так не укусит.” (Д 112)

「犬に咬まれないように犬をからかうな」

“Не вознимайся высоко, так не спустишься низко.” (С 262)

「低いところに落ちないように高く登るな(：“驕<sup>おご</sup>れる者久しからず”)」

## 参考文献 (追付分)

## 1. СБОРНИКИ РУССКИХ ПОСЛОВИЦ И ПОГОВОРОК

Снегирев И.М. *Русские народные пословицы и притчи*. Издание подготовил Е.А.Костюхин. М., Изд-во "Индрик", 1999.

Снегирев И.М. *Словарь русских пословиц и поговорок; Русские в своих пословицах*. Предисл. Е.Группко, Ю. Медведева. М., Изд-во "Терра", 1997.

## 2. ИССЛЕДОВАНИЯ

Тарланов З.К. *Синтаксис русских пословиц*. Автореферат диссертации на соискание ученой степени доктора филологических наук. Л., 1970.

Тарланов З.К. *Очерки по синтаксису русских пословиц*. Л., Изд-во Ленинградского университета, 1982.

Mertvago P. *The comparative Russian-English Dictionary of Russian Proverbs & Sayings*. New York. "Hippocrene Books", 1995.